

6の3

体育科学習指導案

4月25日(水) 2限 運動場
(雨天) 翌日26日2限 運動場
授業者 松田 宏明

1 単元名 めざせ☆アスリートⅡ(リレー)

2 めざす知識創造

速いバトンパスをめざして友達と教えあいながら よりよいバトンパスの動きに気づき それを身につけようとする中で リレーの楽しさを実感していく

子どもにとって鬼遊びは思いっきり体を動かすことができる身近な遊びである。鬼になった子どもは「走る」という行為で対象の子どもを追いかける。また、追いかけられる子どもは、鬼につかまらないように走って逃げる。鬼遊びの中の身体運動の要素である「走る」という行為は日常的によくみられ、誰にでもできる身体運動である。しかし、子どもの「走る」という行為は身体知であり、形式知になっている子どもは少ない。そこで、「走る」ことを体育の学習として取り上げて、自分や友達の体の動きに目を向けさせ、子どもの身体感覚を培い生活に活かす。

本単元では、「走る」にバトンパスの要素を加えたリレーを学習する。リレーはひとりでは成立せず、友達と協力することが前提となる。他のチームとの競走に勝つことや友達と協力しながらチームのタイムを縮めていくことで、チームとして喜びを感じることができる。また、走力は短時間では向上しづらいものの、バトンパスの技能を高めることによりチームのタイムを縮めていくことができる。このように、リレーは技能を工夫することの楽しさを味わうことができる運動である。

子どもは、チーム内の6人の合計タイムを基準のタイムとし、本単元を貫くタイム短縮というねらいをもつ。そして、タイムの短縮をめざして試走する。タイム短縮のためには速いバトンパスができれば有効であると気づく。

子どもはどうすれば速いバトンパスができるか、今あるバトンパスの知識の中から受け手のリードが必要であることを想起し、友達と意見を出し合う。その中から前を向いてのバトンパスができれば、タイムの短縮につながるということをみんなで共通理解する。チームごとに前を向いてのバトンパスをやってみる中で、上手いかないことやこうやればいいんだといった考えの中に、受け手のスタートのタイミングを示すスターティングポイントや渡し手の声の合図の必要性に気づく。そして、それらのチームごとの気づきをクラス全体で共有することで、他のチームの気づきを取り入れようとするだろう。

そして、子どもは気づいたことを身につけようとする中で、どのようにしたら速いバトンパスができるのかがわかる・できるという楽しさ、友達と協力することでタイム短縮が可能になるという楽しさ、全力疾走する心地よさを実感するだろうと考える。

3 「かかわり」を活性化するために

(1) 本単元における「かかわり」の活性化

本単元における「かかわり」の活性化を、速いバトンパスの技術ポイントに気づき、それができるように友達と練習していく中で、リレーに対する価値観が広がっていく状態ととらえる。

速いバトンパスの技術ポイントとして、受け手はスタートのタイミング、前を向いての走り出し、短時間でのトップスピードへの走り、声の合図からの反応、手を出す位置などが考えられる。また、渡し手では受けてとの距離感をつかみ合図の声を出すタイミングや大きさ、バトンを押し付ける渡し方が考えられる。子どもの実態から本単元での学習内容を、受け手はスタートのタイミングと前を向いてバトンをもらうこと、渡し手は合図の声のタイミングや大きさに、それぞれ重点を置いて行う。

(2) 本単元における「かかわり」を活性化する手だて

教師は子どもの意識に沿った支援の見通しをもつために、子どものリレーに対するイメージやその学習で学んでみたいことを事前に把握する。そして、単元を貫いての学習課題を設定することで子ども一人一人が適しためあてを持てるようにする。子どもが適しためあてをもつことは、自己のめざす姿を思い描きながら自己の変容に気づくことにつながる。

ビデオで自分のバトンパスを撮影し観ることで、自分では気づかない姿を見ることができるようにする。また、思い通りの動きができていないかどうか確認でき、新たな課題を見つけることにつながる。そして、映像の流れる動きを静止したりコマ送りにしたりし、観点を示して見せることで、運動を見る「目」を養う。これは、動きの中よりよい体の使い方を見ることにつながり、友達のバトンパスでの技術ポイントにアドバイスができるようになる。速いバトンパスの技術ポイントをお互いにアドバイスできるようにになれば、運動技能の習得につながる体の使い方がわかったと捉えることができる。

体育的かかわりが学習ノートに見られた場合、友達にアドバイスすることは自他の学びに有効であること、アドバイスが友達に認められたり、友達といっしょに達成したときの喜びやふれあう楽しさ、全体に広める。このようなくり返しが、体育的かかわりを育むことになる。この体育的かかわりを有効に

活用しながら学習を進めていくことは、子ども同士の伝え合いが増え、バトンパスの技能を習得していく過程で、リレーに対する価値観を広がっていくことにつながる。

4 単元計画（総時数4時間）

主な活動と内容	「かかわり」を活性化の手だてと意図
<p>1 これまでの学習からタイムを縮めるための考えを話し合い、基準タイムクリアに向けてリレーをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんな全力で走ることが大事だ ・落とさず上手くバトンを渡せばクリアできる ・テイクオーバーゾーン内でバトンパスをする ・リードを使ったバトンパスが必要だ ・速いバトンパスをすればいい <p><速いバトンパスってどんなバトンパスなのだろう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・止まってもらうんじゃなく速いリードでもらう ・走ってもらうといい ・前を向いた姿勢でバトンをもらうんだ ・声で合図すれば前を向いていてもバトンが渡せるよ ・そうか声を使えばいいんだ ・その場で止まったままではできなぞ次は少しリードしてやってみよう ・歩いてやってみたらできたから駆け足でやろう 	<p>想起 全体で共通のめあてをもって試走するために、これまでのリレーの学習を想起し話し合う。一人一人によりよいリレーのイメージをつかませて試走に入らせたい。</p> <p>表出・共有 小学生の模範となる動画を見せることで、速いバトンパスのイメージをもたせる。その時、観点してもらう人の動きに絞ることで、前を向いてバトンをもっていることに気づかせる。「前を向いているのにどうやったらバトンもらえるのか」と発問することで、わたくしが声の合図を出していることに気づかせる。表出がない場合は、事前調査でバトンパスで声の合図が必要だと思っている子どもに問いかける。リレーはチームワークが大切だと確認させたい。</p>
<p>2 前時の学習からスタート時の課題を受けて、もらう人のスタートのタイミングと走り方に気づく。</p> <p><どの位置でスタートすればいいのだろう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタートが速すぎるとテイクオーバーゾーン内で渡せないよ ・スタートが遅すぎるとわたくし人のスピードが落ちて速いバトンパスにならない ・スタートする目安の位置（スターティングポイント）を見つけよう ・前を見て全力疾走しよう ・チームでバトンをわたくし声の合図を決めよう ・合図の声が小さいともらう人には伝わらない 	<p>共有 もらう人のスタートのタイミングをつかませるために、スターティングポイントは変えずに、もらう人のスタート位置を変える練習の場を設定する。それは、短時間の学習の中で効率的な練習方法があることに気づかせるためである。</p> <p>共有 速いバトンパスにつながる動きができていないか確認するために、ビデオで撮影し、チームで見ながら互いにアドバイスし合う。全体で体の使い方を見る「目」を養う活動としたい。</p>
<p>3 前時までの学習を確認し、習熟をはかる</p> <p><速いバトンパスをマスターしよう></p> <ul style="list-style-type: none"> ・もう一度動画を見てよい動きを確かめよう ・前時までの学習の大切なことを確認してから始めよう ・それぞれのスターティングポイントの目印を決めよう ・トラックを使って実際に走って確かめよう ・チーム内でアドバイスしながらより速いバトンパスにしていこう ・わたくし人はもらう人を追い越す気持ちで走らないといけないよ 	<p>共有 教え励ましあって学ぶことのよさに気づかせるために、友達と練習する中で、自分の頑張りを友達に認められたり、よい動きができるようになったりなどの学習ノートのコメンを全体に広める。そうすることで、体育的かかわりが育まれていくことにつながる。</p>
<p>4 基準のタイムクリアに向け、タイムトライアルをする</p> <p><さあ記録会、どれだけタイムが縮められるか！></p> <ul style="list-style-type: none"> ・速いバトンパスができるようになったからきっとタイムは縮んでるはずだ ・ぎりぎりバトンを渡せた感覚は気持ちいいよ ・それぞれタイムの縮まりは違うけどみんな気持ちのいい汗をかいたよ ・リレーって楽しいまたやりたい ・運動会のリレーでこのバトンパスを活かしたい 	<p>結合のために リレーの学習から友達と協力しチームの可能性を追求する楽しさや見てわかったことができるようになった楽しさ、全力疾走することがかいた汗の心地よさを共有させるために、ふり返りをする。</p>

5 本時の学習（1／4時）

- (1) **めざす知識創造** ・リレーにおけるバトンパスの重要性を知り、友達と教え合いながら、速いバトンパスの気づきを共有しようとする。
- (2) **展開**

主な活動と内容	時	「かかわり」を活性化する手だてと意図
<p>・準備運動をする</p> <p>＜基準のタイムよりも どうしたらタイムを縮められるか＞</p> <p>1 これまでの学習からタイムを縮めるための考えを話し合い、基準タイムクリアに向けて2組に分かれてリレーをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんな全力で走ることが大事だ ・落とさず上手くバトンを渡せばクリアできる ・テイクオーバーゾーン内でバトンパスをする ・リードを使ったバトンパスが必要だ ・速いバトンパスをすればいい <p>2 全体で試走後の気づきを話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんな全力で走っていたよ ・バトンは落とさずにパスできたよ ・テイクオーバーゾーン内で渡せたよ ・リードが上手く使えなかった ・速いバトンパスじゃなかった 	10	<p>想起</p> <p>全体で共通のめあてをもって試走するために、これまでのリレーの学習を想起し話し合う。一人一人によりよいリレーのイメージつかませて試走に入らせたい。</p> <p>想起</p> <p>速いバトンパスに意識を向けさせるために、1で挙げた全体でもっためあてについて、ふり返らせる。どの子どもにもはっきりとした速いバトンパスのイメージがないことに気づかせたい。</p>
<p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">速いバトンパスってどんなバトンパスなのだろう</p> <p>3 速いバトンパスのイメージをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・止まってもらわんじやなく速いリードでもらう ・走ってもらいたい ・あんなバトンパスできたらタイムがぐっと縮まるよ ・前を向いた姿勢でバトンをもらうんだ ・声で合図すれば前を向いていてもバトンが渡せるよ ・そうか声を使えばいいんだ 	25	<p>表出・共有</p> <p>小学生の模範となる動画を見せることで、速いバトンパスのイメージをもたせる。その時、観点をもらう人の動きに絞ることで、前を向いてバトンをもらっていることに気づかせる。</p> <p>「前を向いているのにどうやったらバトンをもらえるのか」と発問することで、わたす人が声の合図を出していることに気づかせる。</p> <p>表出がない場合は、事前調査でバトンパスでの声の合図が必要だと思っている子どもに問いかける。リレーはチームワークが大切だと確認させたい。</p>
<p>4 グループで前を向いてバトンをもらう動きをつかもう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その場で止まったままではできたぞ 次は少しリードしてやってみよう ・歩いてやってみたらできたから駆け足でやろう <p>5 学習をふり返り 気づきを話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりだけ前を向いてバトンパスできたよ ・前を向いたままでも声を上手く使えばバトンパスをすることができることがわかったぞ ・走るスピードをもっと上げていきたいな ・声を間違えないようにチームで合図を決めよう ・もらう時いつ走り出したらいいいのかわからないな 	10	<p>共有</p> <p>止まった状態でバトンパスすることから始めさせ、次に歩いて、そして駆け足へと移行させながら渡せるように助言する。練習には段階を踏むことが必要であることを理解させたい。</p> <p>結合</p> <p>よりよいバトンパスの動きを確認させるために、体の使い方に変容があった子どもに実演させる。しっかりとしたイメージをつかみきってない子どものために、ビデオではなく実際の動きを目の当たりにさせることで、よりよいバトンパスのイメージをつかませたい。</p>
<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">バトンをもらう人は前を向いて受け取り、わたす人は声を使って合図をするんだ。だから、速いバトンパスができるんだな。</p>		<p>想起</p> <p>わたす人の声の工夫やもらう人のスタートのタイミングの気づきがでたら拾い上げ、次時への課題意識へつなぐ。</p>